

論文

## 逸脱集団への加入と離脱のプロセス

——ある若者の生活史から——

森 康 博\*

### I はじめに

逸脱集団の一つである暴力団への加入については、暴走族等非行を重ねる中で、暴力団に憧れて加入するというケースが一般的であるとされている（廣末2016）。

本論が対象とする暴力団離脱者 T は、暴力団組長の子として育ち、その後、高校へ進学するも喧嘩で退学処分になった後、暴走族、シンナー吸引等と非行をエスカレートさせる中で犯罪グループの一員として次々と犯罪に手を染めていった。このような生活を送っていけば、必然的に親の後を継ぎ、自らも暴力団員（以下「組員」）になると思われるが、T は、これとは全く正反対の行動として、自らの意志で犯罪グループから離脱（更生）するという道を選んだ。そして5年の長期にわたり堅気の生活を続けたのちに組員となり、その後自らの意志で離脱した。

筆者は、この特異な二つの逸脱集団（行動）を経験した T への生活史インタビューを行い、T 自身が、犯罪グループ、そして暴力団という二つの逸脱集団に加入し、そのつど、そこから抜け出すために、自ら行動を起こし、離脱（更生）するに至っているが、その理由や動機を知り、その意味づけを理解することを目的とした。

### II 先行研究と研究目的

本論では、犯罪グループにかかわり、その後、暴力団にかかわったある若者の逸脱集団への加入と離脱の連続過程を明らかにする。

逸脱集団への加入に関するものとしては、加入者が生まれ育った地域やそこでの人間関係とむすびつけて考察した研究は少なくない。古典的なものとしては、若者の階級文化に注目した Paul Willis (1977=1996) や、ドラッグや音楽などのサブカルチャーに注目した Howard S. Becker (1973=2011) などが挙げられる（森 2020:207）。また、最近の逸脱研究としては、Willis の主張する「階級文化」（「反学校文化」）の視点だけでは捉えきれない、多様な価値観を持つ「ヤンキー集団」（若者集団）を扱った知念渉（2018）や打越正行（2019）の研究がある。

知念は、「ヤンキー集団」が属する一枚岩とはいえない集団内部の「社会的亀裂」（階層性）に焦点を当て、彼らが高校を卒業（中退）して仕事に就くまでの過程を描き出し、打越は、「ヤンキー」といわれる若者たちがどのように生きたか、また、生きようとしているのか、一人ひとりの視点から描いている。これらは全て、逸脱社会に生きる若者の集団的なアイデンティティの問題を考察したものである。

若者が非行に走る背景に、「環境要因」を見ているものに、松浦直己（2015）や岡邊健（2013）があるが、岡邊はとりわけ「反社会的な両親の存在」に「リスクファクター」を見ている点で、本研究ともかかわってくるだろう（岡邊 2013:10）。

また、暴力団への加入に関しても、その要因として、松浦や岡邊の主張と同様、「交友関係」や「地域性」に注目

---

キーワード：暴力団、生活史、離脱、更生、青少年の非行

\*立命館大学大学院先端総合学術研究科 2014年度3年次転入学 公共領域

した研究に廣末（2016）があるが、具体的に、そこで記述されている、暴走族など非行集団の一員として非行を繰り返すなかで、やがて暴力団に憧れて加入するというケースは、本論の分析対象とも重なる部分が多い。

本論が対象とする T は、父親が暴力団組長であったことから、幼少期に、周囲から避けられ、友だちと話す機会が少なかったという。「コミュニケーションの乏しさは、攻撃性を高めて粗暴行為を増大させ」る（山脇・河野 2020:28）と言われているように、これも T の非行に繋がった一つの要因かもしれない。また、T の非行、犯罪グループへの加入については、松浦や岡邊の「環境要因」に当てはまると思われるが、T の暴力団への加入については、非行から暴力団への加入を連続性で捉える廣末らの研究とは別のケースとして捉える必要がある。というのも T は、犯罪グループから離脱し、その仲間と 5 年の歳月を経て再会し、彼らが暴力団に所属していることを知らず、交際を重ねるうちに、組員になることを勧誘され、断り切れずに組員になっており、T の犯罪グループから暴力団加入までのプロセスを単純に連続的なものとして捉えることができないからである。

逸脱集団からの離脱について、河野 莊子（2009）は、「非行・犯罪者自身が離脱することを必要とし、そこに動機づけられることが何より大切なのである」（河野 2009:44）と指摘しているが、T のケースも、かつての非行仲間の更生した姿をたまたま目にしたことが、T の心を動かし、犯罪グループからの離脱に繋がっている。

暴力団からの離脱の要因について、廣末（2016）は、結婚や就労を通じて、成人期に形成される「社会的ボンド」やインフォーマルな社会によるコントロールが、従来の犯罪性向のあるなしとは関係なく、暴力団からの離脱につながる（廣末 2016:194-5）ことを指摘している。

T のケースも、廣末の主張するケースに該当はするものの、ただ、T の場合、これとは別に、予期せぬ T の逮捕という出来事が引き金になっている。その結果、離脱に繋がる要因となる複数の「社会的ボンド」や「社会関係資本」が生まれ、離脱に繋がったという特異なケースが T である。

筆者は、人は長い人生の中で、自分の置かれている境遇や、身近な人とのかかわり、それによって生じるストレス、また、突発的な出来事等、様々な影響を受けながら生きており、その過程で逸脱や離脱（更生）を繰り返すものだと考える。

そうであるならば、その人の歩んできた過程を辿ることによって、その過程で何が起り、何を思い、逸脱や離脱に至ったのか、その詳細な経緯に目を向けるべきではないだろうか。

本研究では、このような趣旨から、T の生活史を辿り、T の逸脱集団への加入と離脱に繋がる要因を明らかにしていく。

### Ⅲ 調査協力者

調査協力者の暴力団離脱者 T について述べる。彼は 2019 年 12 月現在、39 歳で、2019 年 4 月、警察に暴力団脱退届を出して離脱し、同年 9 月、就労を果たしている。

## Ⅳ 研究方法と調査倫理

### 1 研究方法

暴力団離脱者 T の生活史をたどり、暴力団組長を父親に持つ彼が、どのような経緯で逸脱集団（犯罪グループ）に加わり、更生するも、再び逸脱集団の一つである暴力団へ加入し、離脱に至ったのかを明らかにするために、半構造化インタビューをおこなった。

同インタビューは、2019 年 12 月 24 日（2 時間 10 分）、2020 年 7 月 17 日（約 20 分）、2020 年 8 月 5 日（約 20 分）の合計 3 回実施した。なお、7 月 17 日と 8 月 5 日のインタビューはコロナウイルス感染予防のため電話でのインタビューとなった。

データの分析には、T へのインタビューを書き起こした逐語録をもとに犯罪グループと暴力団への加入と離脱を繰り返すに至る経緯を明らかにするため、生活史分析をおこなった。結果の節において用いる（ ）は補足説明を示している。

この論文に出てくる地域名・個人名・組織名・企業名は全て仮名である。

## 2 調査倫理について

調査協力者であるTに対して研究の趣旨や個人情報の保護、研究結果の公表、ICレコーダーによる録音と逐語録の作成などについて、文書と口頭で説明し、同意書を交わした上で実施した。

## V 結果

Tへの聞き取りを通じて、非行から犯罪グループ、そして暴力団に入り、やがてこれら二つの逸脱集団から離脱に至るTの生活史を明らかにする。

### 1 子どものころ

#### (1) 家庭環境と友達関係

Tは、父親が暴力団組長という家庭で育ったことについて、以下のように語っている。

小学校の時は、今みたいに隠さなかったので、自分の親父が何の仕事をしているとか。今は「親父が暴力団」だったら、そのことを小学校では言わないでしょう。まあ、そういう時代ではなかったので。親父が暴力団というのを近所の人も知っているし、勿論、友達のお父さん、お母さんも知っているし、そういうことで、やっぱり友達とも少し距離があって避けられるし、よく逮捕されていたので新聞にも載るし、なかなか友達付き合いというのは、小学校ではできなかったですね。

さらに続けて、

小学校低学年のときは結構いじめられていて、高学年になるとやっぱり体も変わってきて、ある程度力もついてきたので、まあ、自分で、何とか、喧嘩したりするようになったので、いじめられることはなくなりましたが、ただ友達というと2、3人くらいでした。やっぱり同じような環境の片親の子どもとか、登校拒否の、といっても今のように家に引きこもる方ではないし、外で遊ぶような子たちとつるんでいました。

このようにTは、小学校低学年ではよくいじめられ、小・中学生のころは限られた数人の友達しか出来なかったと語っている。それは父親が暴力団という家庭の子という社会的レッテル（ラベリング）が影響していたのかも知れない。

#### (2) 野球少年として小・中学校時代

このような家庭環境の中で、小学校4年生から地元の少年野球に入り、中学校では野球部に入学し、3年生で引退するまで野球を続けている。Tにとって野球は、多くの友達と出会える（差別されることなく友達と出会える）場であり、これが唯一の生きがいであったのかもしれない。

## 2 逸脱行動について

### (1) 非行の始まり

Tは、野球部引退後、親の意向で、地元の中学校から私立の中高一貫校に転校した。それについてTは以下のように語っている。

僕はR中学校。途中から野球推薦でJ中学（中高一貫校の中学部）に行きました。中学3年で野球が終わるので、終わってそのまま学校に居たらグレてしまうというのでJ中学に入れられたんです。J中学では、みんな仲が良くて、どっちかという、やっぱり県外から来ている人たちばかりで、親の環境もみんな複雑で、お金持ちだったり、親が暴力団の人も結構いたり、お父さんが〇〇組だとかいう人もいたので、逆に気が合うメ

ンバーで仲良くやっていました。

僕は、そこでも悪いことばかりして、2か月くらいで直ぐに停学になりました。中学3年の2学期からJ中学に行くと、3学期には停学で、私立なので中学校でも停学がありました。高校は別の私立の高校に野球推薦で行きました。そこでも喧嘩して一か月くらいで退学になりました。理由は、他校からちょっかい掛けに来るんで、それに田舎の不良も加わって喧嘩になって。

## (2) エスカレートする非行

Tは、高校を退学となった後、非行がエスカレートしていった経緯を以下のように語っている。

普通に不良が歩む道を、悪いこといっぱいしましたね。色々なことを。暴走族にも入っていました。皆でグループを作ってシンナー吸ったり、原付窃盗してみたり、そういうことばかりしていました。

問：Tさんがリーダーになってですか？

僕らの時はリーダーというよりは、横のつながりが多かったです。同級生や、年上や年下も集まって楽しいメンバーでやっていました。

最初はそんな感じだったんですが、やっぱりどうしてもそういうところから、暴力団と近い距離の人たちとか、自分の父親（暴力団）と近い距離の人たちとかに出会っていくことがあって、17、8くらいになると30代の後半くらいの人たちに誘われて、あまり意味も分からずに空き巣に入ってみたりしました。

そうやって来ると、自分たちがやった悪いことを隠すためというか、どこかで自分が抜けようとする、「バラすぞ」とか脅かされたりして、段々と結びつきが強くなって、そういう人達と深く繋がっていきました。

問：そういうことがどれくらい続いたのですか？

10代の時はわかってなくてやっていて、20代になると、さすがに分別もある程度つくんですが、どうしてもそういう付き合いが辞められなくて。あと薬物とかもそうですね。自分の小遣いをどうやって稼ぐかと考えると、空き巣とかをずっと続けていくのはなかなか難しいので、今度は恐喝してみたり、薬物売ってみたりで、あとは人夫貸しとかしたり、金貸しをしたりして、自分の生活費を稼いでいくようにしていました。

問：金貸しは自分で？

そうですね、もともとパチンコ台に機械を付けてパチンコをするという体感器（遊技台の攻略に用いられる機器）、僕らのときはゴト師と呼ばれ、パチンコ屋から違法にコインや玉を窃取してそれを現金に換えて、そういうので資金をどんどん作って、それを元にトイチとかで金貸しをして、金利をもらって生活をしていました。

問：お父さんから「組に来ないか」との声掛けはなかったの？

親父は逆に、それだけは反対していました。「堅気でやって行けよ」「暴力団にはなるなよ」と言われて、でもそういうことも聞かず、色々な人達と付き合いしていく中でどんどん悪くなって、まあ、大阪にお金持ちがいるから、強盗に入る下見に行こうとか、そういうので誘われて。あとは薬物も自分たちが使うだけではなくて、多めに仕入れて大阪に買いに行ってC市で売ろうとか。

## (3) 父親の組事務所との関係

T自身は組員ではなかったが、父親の事務所に入出入りする組員との関係について下記のように語っている。

仲良くなって飲みに行ったりしていました。でも、あまり僕が言うことを聞かなかったの、Cにいる時は組員とも喧嘩になるし、逆に親父には迷惑をかけたと思います。

問：喧嘩しても親分の息子だからということで助けられたりしたの？

そうですね、他の組の人間叩いてみたりして探された時も、結局、最終的にはかばってくれるというか。周りの人たちも話の間に入って来て、警察には行かないように、示談もお金がかからないように、相手を黙らせてくれるような動きもありました。

#### (4) 逸脱行動からの立ち直り

Tは20歳を過ぎてからも逸脱集団のメンバーとして生活していたが、そんな自分の生き方が嫌になり、自らの意思で逸脱集団から足を洗うことを決意し、一人で親元を離れて就労しまじめに働いた。そのことについて下記のように語っている。

最終的には、そういう生活が全て嫌になって、それが27くらいの時でしたかね。かつての（非行）仲間が真面目になって働いているのを目にしたとき、この歳になって、未だにこんなことをしている自分のみじめというか、嫌になり、自分も人並みの生活をしようと思い、派遣会社に登録して単身で最初は静岡県に行きました。そこで働いたのが山川電機で、最初派遣で働いて、半年で期間が終了して、今度は、また派遣会社が、「兵庫県のV市の山川電機で募集があるんで行きませんか」ということで兵庫県に来て。

最初はV市で派遣として働いていたんですが、職場の上司の人に気に入ってもらって、「山川電機で直接働きませんか」というお話をいただいて試験を受けました。あまり学歴を言われるようなところではなく、能力があれば受け入れますよ、という会社だったので。そこで直接雇用してもらって、それから5年くらい勤めました。

### 3 暴力団への加入

#### (1) きっかけとなった経緯

Tは、V市にある山川電機の社員として働いているときに、昔の仲間が自分を探しているとの噂を耳にし、その仲間との再会が暴力団加入のきっかけとなった。その経緯について下記のように語っている。

ちょうど5年目で兵庫県の女の子と3回目の結婚をして子どもが生まれた時に、C県でもともと昔つるんで悪いことをしていたメンバーが強盗で捕まっていたんですが、それが（刑務所から）出て来て、僕を探していると。ちょうど僕が県外に出た時期と、自分たちが捕まった時期がかぶっていて、僕が、まあ、警察に喋ったんじゃないかという話になって。

もともと現行犯で捕まっているので、その可能性は無いんですけど、そういう話が僕に聞こえてきて。僕も否定するやないですか。否定のために連絡を取ったのが足掛かりで、まあ、その人たちと再度結びついてしまっ。その人らあも、ちょうどC市から出てきて、「緑組」に在籍してて、それを知らずに、まあ、ちょっと会いに行ったら、「ご飯を食べよう」ということで。昔のいこう（つながり）もあるから、いわれの無いことなので、会っても僕的には非が無いので、「ああいいですよ」ということでご飯を食べに行っ。

そこで仕事の話になって、そこで最初は（仲間が）暴力団に入っているという話は聞かなくて、ご飯食べたりして、僕も県外に出て何年も経っていて知り合いもいなくて、そこで出会ったので、その時は同郷の人ということで、すごく親しみを感じて、休みにはN市に行き仕事を手伝ったりして、その時に、「仕事を辞めて、こっちの仕事を手伝ってくれないか」という話になって。

まあ、その時は夫婦関係もうまくいってなくて、そのことを知っている職場の同僚にも責められるようなことを言われて。毎日のようにイライラしてて、妻の顔も見たくないというような状況だったので、「もうどうでもいいや、こんな生活やっておれるか、やめや」という気持ちになっていたんで、「いいですよ」と引き受け、会社を辞め、妻とも別れてN市に行っ。引き受けたのは、金のためでもなく、手伝っている仕事が面白い訳でもなく、ただ、それだけの理由でした。

その後、心機一転、N市に出て、そこでインターネットでカジノの経営とか、守代（用心棒代）の集金をしたりしていました。

問：インターネットでカジノの経営というのは？

海外の大手のカジノのポイント（金券）を買って、それを自分のパソコンのサイトにプールしておいて、客の求めに応じてそのポイントを売って。客は、そのポイントを使ってパカラ（賭博）とかをするんです。例えばポイントを50万とか大量に買えば最大55パーセント割引があるので、その割引額が利益になるので。ポイントを買わずに空売りもしていましたね。客が勝てば、その分だけ客に支払って。

問：じゃあ、カジノの経営とか守代の収入を合わせた額と「山川電機」の収入とを比べてどっちが多かったの？  
「山川電機」では月 30 万貰ってました。カジノは、仲間との折半なので大した収入にはならなくて月 20 万ぐらいでしたかね。他に自分で建物を借りて、また貸して、その家賃収入を得たり、他にも収入があったんですけど、薬（覚せい剤）をやって（使用して）いたんで、その支払いもあって現金は手元に殆ど残らなかったです。集金した守代は全て組織に収めていました。

最初はそういう半グレみたいなことをやるようになって。その時に何かおかしいとは思っていたんですが、直接話をされていなかったんで、あまり気にしていなかったんです。それがある日、緑組の事務所に一緒に行こうということになって、まあ、ついて行って親方（親分）に会って。そこで初めて話を聞いて、今更（組員になることを）断れなくて。

問：盃事（組員になるための儀式）はされましたか？

元々その時は、「空組」は盃をしないという、上も下もないというところで、勿論上下はありますが、親と子にはならない、という組だったので。

今はたぶん盃交わしてという人はいないと思います。実際には昔みたいに盃交わしてというのは、逆にそれをすると、今度は親分も逃げられなくなるので。僕らが例えば、銃刀法でパクられたら（捕まったら）親分自体も一緒にやられるから、親分も盃をしたがらないんですよ。公に「子分です」となると、子分が捕まった時に一緒にパクられてしまうから、だから、そこでは法律的には凄く効いていると思います。子分と認めて、仮に子分が他の組の誰かを襲ったら親分もいかれるから、損害賠償責任も組に来るから、何億という請求が組に来るわけじゃないですか。そんなリスクを抱えられないから。

親分同士は盃をします。本家の親分と、その傘下の親分は盃を交わしても、傘下の親分が直接犯罪をすることはなかなかないですから。

T が暴力団に入った時期、その母体となる組織が分裂し、新たな組が発足した時期と重なっていた。T が関わることになる空組もこの時期に発足し、組員の取り込みがおこなわれている中で、T にも声がかかった。

「青組」が分裂した時で、まあ、ちょうどその一、二ヶ月くらい前に（組に）行ったので、内部的には分かるといえるのは、この間殺された〇〇親方（組長）以外はみんな知っていて、謀反を起こしますというのはみんな知っていたんですが、親方が来るとみんなそんな雰囲気もないような感じで取り繕って。でも内部的には「空組発足します」、「そこについて行きます」というのができていて。そこで、上田という人が居て、そっち側に行くよと。その人も元々 C 県なので。それで、その下にいた人間も C で、C のつながりでそっちに行くよ、というのは決まっていたので、盃というよりは「どっちに行くか」ということの方がね。

「〇〇親方」というのは、かつて「紅組」傘下の緑組の組長であったが、紅組が分裂し、青組が誕生したときに、青組の傘下に入ったもの。その青組も一枚岩ではなく、ここでも内紛が起り、分裂し空組が誕生したことで、T から緑組の多くの組員が親方を捨て空組に移籍することとなる。その後、親方は、青組と対立する紅組傘下の組員により殺害された。

## (2) 組員としての活動

T 自身は、組員としての認識はないまま組員とし活動していたことを下記のように語っている。

僕自身、もともとが（暴力団に）入っているつもりがないので、盃もしていなくて、事務所に出入りしていた状態。組自体は人数集めもあるので、集まった人間の名前さえわかれば（組は）勝手に登録してしまう。そんな中で 1 回目捕まった時も、2 回目捕まった時も、3 回目捕まった時も（警察に）暴力団としての取り扱いをされて、僕的には「（暴力団に）入っていないです」という話をずっとしていたんですけど、事務所に出入りしていて名前も載ってて、となると、僕らが「暴力団です」と言うものでもないし、僕らが何かを決めるもの

でもないじゃないですか。警察が決めてしまえば暴力団だし、僕らが「今から辞めます」と言っても「(暴力団を) やります」は言わないので。どちらかと言えば事務所に出入りして、金銭的にも結びついて、事務所にお金を入れている。事務所の活動、例えば、「事始め」(暴力団の新年の集い)とかに出席していたら、もう組員とみなされるから。

問：組には定期的の上納金を入っていましたか？

そうですね、どうしても組の運営費もあるし。かせごとと思っても、今はそれこそ振り込み詐欺とか、恐喝も中々難しいです。

#### 4 暴力団からの離脱

##### (1) 仲間とのトラブル

Tは、仲間とのトラブルから離脱に繋がっていった経緯について下記のように語っている。それは覚せい剤に手を染めたことから始まったという。

昔のメンバーもいっぱいC市から出て来て、そこで覚せい剤をさわっている人間とも知り合って、まあ、(僕自身が)興味本位で覚せい剤を使うようになって。覚せい剤を使うメンバーは、自分たちに資金もないし、さあ、どうしようということで、最初に恐喝と恐喝未遂で事件を起こしてから何か月後に逮捕されたんですけど、その何か月かの間に、覚せい剤を売っているメンバーがあまりに多いから、やっぱり、薬物を使うと、みんな疑心暗鬼になってあまり人を信用しない。自分がどれだけ親方(親分)に良く思われるかを競うためにつぶし合いが始まって。

その中でも資金的にはまだ僕は豊富というか、もともと仕事をしていたので多少の貯金はあったし、やりくりしていたので周りの人間からしたら、凄くうとうしいというか、薬物も1件仕入れて売ればお金になるし、自分たちは(他の仲間は)薬物を仕入れるお金もないし、となると、やっぱり、そこに差が生まれるので。ひがみもあるし、でー、僕もそれに気づいて、仲間にある程度の支援(資金援助)はしていたんですけど、それでは追い付かずに、ある日、僕が親方のお金を使い込んだと言われて、親方のところに一緒に行ってくれるメンバーと行くことになったんですけど、実は全員グルで。僕が持っているお金を取り上げようと。僕はそれに気づかずに乗ってしまって、行ったら話が全然違うし、みんなが僕の責任にしているし、そこで僕は「もうやっつけられるか」となって。

その時はだいぶ薬物も使っていたので、裏切ったメンバーを毎日探すようになって。毎日刃物を持ってN市を徘徊するようになって。その頃になったら周りからも、あいつ最近おかしいぞ、と言われるようになって。事務所にもバーンと入って行って、だれかれ構わずにどつき回したり、そういうので、僕からしたら全員が信用できないから、全員をどうにかしてやろうと。

Tは、信頼していた仲間全員から裏切られ、やり場のない怒りと絶望感にさいなまれていた時の出来事。

そんな中、恐喝事件で逮捕状が出るというんで、いい機会だからこれを機に(組を)辞めたらうと、捕まって刑務所に行ってもいいわ、というつもりで出頭して。

逮捕された時は、僕は内心は(組を)辞める、(組に)居れないなというのがあったので、実刑になっても仕方ないかなと。だから「示談もしません」ということで、あとは判決を待つ、と弁護士さんに伝えていたんです。

ただ、共犯で捕まった人間が累犯で、次やられると確実に実刑だし、僕は初犯だったので、最悪でも執行猶予がつくやろうと、つかなくても(刑期が)短いでしょう、という話を弁護士さんとしてたんで、わざわざ僕が示談をする必要はないかなと。ただ、共犯の人間が、どうしても示談にしてもらわないと、もう被害届を取り下げてもらわなかったら確実に実刑になるので、お金を積んで示談にすることになって、僕は、それについて出て来てしまいました(釈放になった)。

Tが逮捕されている際に、Tの彼女からTの持っていたであろう金を奪うために、仲間が彼女を拉致し監禁した。

出て来ても、結局誰も信用できずに、自分の彼女も誘拐というか、(仲間)に拉致されたりしていたので。僕がいない間に、「僕が持っていたであろうお金を預かっているでしょう」ということから、「そのお金を僕が逃亡するのに使うと思うけど、直接本人は取りに来れないから、代わりに俺らが持って行ってやるから渡せ」という話をされて。「そのお金を渡すまで帰さんぞ」と。そういう状況の時に僕が不起訴で出てきて、彼女に連絡が取れないので、どうなっているのかと、それで調べていたら「こうこうこういうことで拉致されています」ということで。それでそこへ行って(彼女を)返してもらった。

Tはすっかり薬物にはまってしまい、自分の組と対立する組から薬物の提供を受け、それをネタに彼らから利用された。

味方してくれるのは別の組(反対勢力)の人間で、自分が薬物を仕入れていた先の人間で。それでどんどん薬物にはまって行って。今度はそっちとの結びつきが強くなって行って。僕がいたのは空組というところだったんですけど、薬物を提供してくれていたのは(反対勢力)の青組だったので、そこで、その人達にしても、自分たちの気に入らない組が揉めているというのが凄くおもしろかったのかもしれないですけど。

そこで、どんどん薬物を仕入れては売ったり使ったりして、どんどん頭もねじれて行って、最終的に、僕は空組からは破門といわれていた。そんなのはどうでもいいわと思って、事務所に乗り込んで人さらって、まあ、それこそ(相手の話を)録音したりしてたんですけど、結局自分は間違っていない(親分の金を使い込んでいない)という証明をしたくても、その時には無駄で、それにも気づかずに、ずっと、自分が正しいというのを証明したいという気持ちだけでした。

それでも薬物を続けていて、N市から今度は大阪の青組の人間が持っている建物に引っ越して、そこで生活するようになって。そこでもずっと薬物を続けていて、今度は青組の人間にうまいこと使われるというか、運び屋をやらされたり、売り子をしてみたり。

問：青組との盃ごとはなかったですか？

そうですね、どっちかという、いつパクられても(逮捕されても)いいような使い方だと思います。売り子させたり、運び屋させたり、集金させたりですね。

問：それはTさん自身が「青組の組員になった」ということはないの？

そういうのはないですね。その時にはまだ空組の方に在籍があったので、ただ「空組を裏切っている」という言われ方をされていたので。自分に害はなかった。直接、向こうが報復しに来ることもないし、どっちかという向こうは僕と距離を置きたい。裏切っても、なお関西に居続けるヤツだから。

問：Tさん自身がね？

そうです。向こうからしたらね。自分らがのけ者にしたら、普通だったらいなくなるとか、県外に出ていなくなるとかですけど、僕はしつこく関西に居続けたので、どっちかという、向こうも(僕が)距離を置いてくれた方が助かる、というスタイルだったので。

問：敵対する青組の方に行ってもらった方がいいという感じですか？

そうですね。わざわざ帰ってこられて、「お前裏切ったやろ、裏切ったやろ」と、全員に問い詰められるよりも、何事も無かったかのように別れてもらったなら、という感じで。

## (2) 離脱につながった出来事

Tは、実際に離脱につながった出来事について下記のように語っている。

(不起訴で)出て来て、そういう事をしながら自分も薬物を使用していて、で、その中で2回目に逮捕されて。それが(警察官に)職務質問を受けた時に腕とかを見られて、注射痕があったことから、しつこく付きまとわ

れて、最初はまあ、任意なので尿検査も断って、ただ大阪（大阪府警）とか関西系（近畿の各府県の警察）は結構、そういう事に慣れているし、（取り調べが）厳しいから、まあ、任意で断っても、どんどん警察官が増えてきて、その間に僕の名前も調べれば、まあ、（組に）在籍もあるし、そしたら逮捕状も取りやすいし。逮捕状と家宅搜索令状を取る時間を、僕からしたら稼がれていて。僕は「逮捕状が出たら出頭しますわ」という話をして家に居た。でも家も20人くらいに囲まれていて、裏とかも5人くらいいるし、家の前も5人くらい居るし。そんな中で逮捕状が出て、尿検査に応じて、尿検査をしたら薬物の反応が出て、覚せい剤の使用で逮捕されて。それは29年（2017年）の11月くらいの2回目の逮捕で、まあ、その時は覚せい剤で大阪で逮捕されて。覚せい剤も初犯だったので保釈で出てきたんです。

睡眠薬を常用し、意識がもうろうとしている中で彼女に暴力をふるい逮捕される。これが後のTの離脱に繋がった。

それから少しして、今度は睡眠薬とか安定剤も飲みだして、ちょっとわけが分からなくなって、その時に一緒に居た彼女に暴力を振るって。素面に戻って、その彼女を病院に連れて行ったところ、病院が彼女の様子がおかしいと。「自転車でこけた」と言って連れて行ったんですが、あきらかに暴力を受けている可能性があるとして警察に通報されて。それで逮捕状が出て、家にいたら逮捕しに来て捕まって。

今は病院が通報します。殴ったらコブシの跡もわかるじゃないですか、殴ったりしたらね。携帯投げて彼女に当たって傷害でパクられて（逮捕されて）。

### (3) 離脱への思い

Tは、組を離脱する思いを下記のように語っている。

その時にですかね、こういう生活をやめないといけないなと思って。逮捕されて取り調べの中で、「今度は真面目にちゃんしようと思う」という話をしていたら、そしたら「今は、まだ（組に）在籍があるから直接就職するというのは難しいけど、警察に暴力団を排除するという取り組みがあるので、一度本部（警察本部）の人間と面接してみますか」と声を掛けてもらったので、「是非」とお願いしました。

自分は、（暴力団には）未練もないし、薬物にこのまま溺れていくのも嫌だし、自分の彼女にまで怪我をさせて、彼女自体は被害届を出さないということで、まあ、僕の謝罪を受け入れてくれたので、「これがいい機会かな」と思って。その中で話を聞いたら、僕は学歴も無くて、そういう過去もあって、もともとハローワークとかにも就職の相談に行ったんですけど無くて。薬物使っていても、「就職はしないとイケないな」と思っていて。

問：それは、彼女に怪我させてからのことですか？

（離脱を考えたのは）その前くらいからですね。ただ就職先も無くて、「わざわざ自分が元暴力団です」とか「暴力団を辞めたいから」とかいう話ではないんですけど、やっぱり、そういう道に行く（一般社会で仕事に就く）というのは学歴も伴っていないので、中卒で逮捕歴もあり、その時には口座も作れなくなっていたので、口座も持ってなくて。ましてや自分の名前で建物（アパート）も借りれないし、携帯も契約できないし、「そんな人間を誰が雇いますか」ということで、（ハローワークに行っても）面接まで行くこともなく。

そんな中で話をいただいたので、「これはありがたいな」と思って、ちょっと興味本位で話を聞いてみようかなと思ったのが最初で。

逮捕され勾留中の身で将来に不安を抱えるTにとって、取調官からの就労に繋がる支援者との面接の確約は、次につながる良法であった。

調べが終わって、勾留中だったんで、刑事さんの方から、彼女が被害届を出せば起訴されるし、警察としては「（被害届を）出して下さい」というアクションで最初行くので。警察も、僕が出れるかわからないのに就職の話はできないから、なかなか微妙だったと思います。ただ、彼女が一貫して「被害届は出しません」と言っ

てくれてたので、警察が勾留してるけど不起訴になるじゃないですか。それで、まあ、そういう時に、また何かしたら4回目の逮捕になってしまうので、不起訴になって出れるんだったら、出た日に、暴排（兵庫県警察本部暴力団対策課暴力団排除係）の方から来てくれて、そこで暴追センター<sup>1</sup>（暴力団追放兵庫県民センター）の人と会う約束をしてくれたんです。

## 5 離脱支援について

### (1) 離脱に至る道のり

Tは、離脱を決意した経緯について下記のように語っている。

刑事さんが、暴排の方に連絡してくれて、暴排から暴追センターに、「こういう人間が居て、本人も就職を希望しているから面接してくれ」と紹介してもらって、ここで（県警本部で）会わせてもらったんです。

Tは支援者との面接に先立ち、自分の将来を見据えて、自分なりに心の整理をおこなったのち離脱を決意した。

その代わり、もう、自分が「暴力団ではない」と、なんぼ言っても仕方がないし、周りも（暴力団と）周知しているじゃないですか。（組員と）登録されている現状では、生活保護の申請も通らないし、口座も作れないし、色々と支障があるわけじゃあないですか。そこは自分で「（組員を）やっています」と認めて、「辞めます」と言った方がいいじゃないですか。でないと話が結びつかないし、あのままだったら、ずっと（組員としての）登録が残ったままで何もできない状態だったから、ハッキリ、この際、今（組員の）登録があるのであれば、最短で（登録を）外せる方法で、ということで脱退届を組に出せば、組から「この人間は辞めました」と言うのを貰えれば、公にも兵庫県警も大阪府警も含めて「辞めましたよ」と認められるから、それやったら、「（組員を）やっていない」とこたわっても仕方がないし、自分の生活も成り立たないの。

（離脱）理由はやっぱり複雑で、自分が（組員の仲間から）裏切られたという気持ちも多少なりともあったし、そんな中で、結局、自分の彼女のことや、自分の生活のこともあり、（組員であることにより）就職もできないし、かといって生活保護も受けられない、で、かといって暴力団にまた戻るといのもあったんですけど、その中で一番まともな選択をしようと思って。理由というよりは、結論がどこにあるか、という選択肢だと思います。辞める理由とか、これが原因でこうなるのではなくて、どんな原因でもいいから一番まともな選択肢を選ぶと、必然的に辞めるという選択肢しかないなという。

問：Tさん自身が、自分は組員とは思ってなくても、組織はTさんを組員と思っているから、そう簡単に辞めさせてくれないと思うんですけど？

僕自身は報復とかはあまり深く考えていなかった。（同じ組の者と）揉めているときからN市にいたので、家の鍵もありますけどしてなくて、薬物でおかしくなっていたので、その流れの中なので、まあ、「指飛ばせ」という話もあったけど、自分で飛ばすんだったらあれなんですけど、「飛ばそうと思うんだったら、飛ばしに来たらいいやないか」みたいな感じでいました。もともとが、破門とか絶縁（暴力団社会で組織に背いた際の処分）とかいう話だったので、流れの中でいくと（警察から）一番ありがたい話をもらったので、まあ、こういう警察を使って正式に、暴力団と認定したところが、今度は「それを撤回しましょう」と言ってくれて、そこが一番大きいと思います。

認定したところが、「辞めましたよ」という認定をしてくれれば、まあ、後ろ盾じゃないですけど、その代わりに僕がよく言うのは、3の倍数で薬物は再犯率が高くて、覚せい剤でいうと7割以上ですかね。これも表立って7割以上、裏を含めるとたぶん9割以上が薬物を1回やると再犯すると言われていた中で、こういう繋がりもできたし、「1回だけ紹介してもらって就職しました。あとは知りません」という付き合いだったら、また別かもしれないですけど、こうやって（社会復帰アドバイザーに）サポートしてもらって、定期的に顔も見に来てくれて、そんな中で、何というんですか（就労しても）3か月とか1年（で辞めてしまう）と言われていた中で、そこに自分は入りたくないと思うし、どっちかという「元気でやっています」と言いたいからです。

## (2) 脱退について

Tは、離脱するに際して取った自分の行動について下記のように語っている。

そうですね、最初に離脱の話をしたのは出てきた日（釈放になった日）ですね。勾留が終わって出てきた日に、暴排の方から、まあ、条件としては、「今、暴力団であることを認めて『脱退します』』というのを明確に意思表示してもらいたい」と言われて。その代わりに、こちらとしては就職を含めて、今後、再犯も含めてしないようにサポートをしてくれるという話だったので。それに関しては自分も、出てから就職先もなく、また、これから何かをしようかと考えていた時に、他にできることもなく、まずは（暴力団を）辞めて、一步踏み出さないと、ことが始まらないのであれば、そこは大きな一步を踏み出して何とか現状を変えたいと思って。

すごく熱心に話をしてもらって。今の現状は、辞めたい人もいっぱいいると思うんですよ。でも、もうまともじゃない人も現実にいっぱいいるんですよ。こうやって現実に話ができない、辞めて就職したくても、薬物でおかしくなっちゃってしまったり、指がなかったり、まあ、見た目になんか表れてしまったりで。そういう人も現実にいるので、そんな中で声を掛けてもらって、やり直すチャンスがあるのかなと、自分なりに思っ

その時に脱退届を書いて、その間に脱退を進めてくれて、同時に、ここ兵庫県警でアドバイザーの人も交えて、自分の今後について、どうしたいのかを詳しく聞いてもらって、それに合った就職先を提供してもらったらいかなと。

問：脱退届は何処で書かれました？

出て来て（釈放になって）、N北署の中で書きました。

組長には、警察の方から「本人が辞めると言っています」というのを、僕の署名付きの脱退届を出してもらって、それに対して「わかりました」という返答を組長から書面で直接もらってきてくれたので。

## VI 考察

少年期から青年期にかけて逸脱集団の一員として非行・犯罪を繰り返したのちに更生し、5年の長期にわたり一市民として働いていた若者が、何故、再び逸脱集団である暴力団に加入し、そして離脱に至ったのか。

Tは父親が暴力団組長であったことから、友達とも距離を置かれ、小・中学校では殆ど友達をつくることができなかった。そんな中で、Tは中学校では野球部に入部し、3年生で引退するまで野球を続けている。友達のいないTにとって野球は、「暴力団組長の子」とラベリングされることなく、野球を通して同世代の友達と交わることでできる唯一の場所であったと思われる。野球がTにとって暴力団組長の子という差別から逃れ、野球という共通の趣味を持つ友達と一緒にのびのびと交われる居場所であっただけに、Tが野球部を引退するということは、暴力団からTを隔てる柵がとれることをも意味した。子どもたちが犯罪行為に走る原因として、よく子どもたちの環境が問題にされる（cf. 松浦 2015:38）。Tは中学3年で野球部をやめるが、そのことで、野球部でできたこれまでの友だちとも関係が切れ、それが彼をますます別の友だち関係（遊び仲間とのかかわり）へと近づけていったのではないだろうか。岡邊は、「犯罪や非行も、さまざまなリスクファクターが累積し、それらが複雑にからみあって作用した結果、ある確率で発生すると考える」（岡邊 2013:9）と指摘するように、これがTの非行に繋がったのかもしれない。

Tが野球部を引退した後、非行に走ることを心配した両親が、地元の中学校から私立の中高一貫校（中学部）に転校させているが、そこでも次々と問題を起こし、中学部卒業後、別の私立高校へ入学するも1カ月足らずで喧嘩をして退学処分になっている。その後のTの非行はエスカレートし、大人に誘われて空き巣に入るなど、犯罪行為を介して犯罪グループとの結びつきを強めていった。岡邊は、これについて、「学校不適應は、中学在学中か否かを問わず、再非行リスクを高める方向に機能している」（岡邊 2013:114）と指摘している。Tは20代になっても、彼らとの付き合いが辞められず、次々と犯罪に手を染めていったが、27歳になった時、たまたま、かつての非行仲間が真面目に働いている姿を目にし、いまだにこんなことをしている自分が惨めになり、足を洗う（更生する）ことを決意した。これがターニングポイントとなって、自らの意志で地元を離れ、就労を果たして犯罪グループから離

脱することに成功する。

それから5年が経過したあるとき、昔の仲間と再会したことで、過去の人間関係が復活することになる。やがて彼らから、自分たちの仕事を手伝うように誘いを受けるが、ちょうどその時、Tは夫婦関係の危機にあった。夫婦関係はTにとってストッパーとしては機能せず、むしろ、過去の逸脱集団に戻ってゆくきっかけの一つになった。いやになったこの現状を変えたいがために、Tは仕事を辞め、妻とも別れて、昔の仲間がたずさわる仕事を手伝うようになった。そんなある日、仲間が彼らの所属する組事務所に連れていかれ、組長に会い、組への入会の誘いを受けたTは、その場の雰囲気吞まれて組員になることを承諾する。

このようにTの暴力団への加入は、自ら希望して加入したものではなく、昔の仲間や組長から誘われ、今更断ることもできず組員になっている。これは廣末(2016)の「自ら求めて組員になった」というケースとは違った暴力団加入の一つの形として捉えることができるのではないかと。

「犯罪から離脱した非犯罪者としてのアイデンティティを確立し、犯罪からの離脱に至る」(横地ほか2018:8)ケースは、過去に犯罪グループ(逸脱集団)から離脱し、長年真面目に働いていたTのケースに当てはまるのではないかと。それでも、Tのケースが示すように、偶然の出来事など、ある条件(要件)が整えば、再度、逸脱集団に加入するという事実が明らかになった。

Tの暴力団からの離脱の経緯は、組員になった後、「親分の金を使い込んだ」と仲間から言いがかりをつけられ、組の仲間を敵に回すことになる。これを境に、Tは刃物を持って裏切った仲間を毎日探すようになった。

そうしたなか、Tは睡眠薬などを常用し、意識がもうろうとしている状態で彼女に暴力を振るったことで、Tにとって予期せぬ逮捕となった。逮捕され、取調べの中で、取調官に「今度は真面目にちゃんとしようと思う」と自分の思いを吐露したところ、「今は、まだ(組に)籍があるから直接就職するのは難しいけど、一度本部の担当者とお話してみますか」と声を掛けられ、「是非」とお願いした。

Tは、逮捕されたことで、心の整理がつき、冷静さを取り戻したことで、仲間から裏切られたことで組織に対する嫌気と仕返しというアグレッションから、最良の策として自ら組織を去るという道を選んだのではないかと。

Tは、組員として生きていこうと思っても、「今は、振り込め詐欺とか、恐喝でもなかなか難しい」と語り、また、ハローワークに足を運んでも、組員であるが故に面接すらままならない現実を自ら体験しており、そうした生きていく上でのTの現実的な認識(暴力団では自立した生活ができない)の中で、取調官から就労の話が聞かされたことが、Tが暴力団から足を洗う上で大きな要因として作用したことは間違いない。

そして、その思いを最後まで後押ししたのは彼女の存在だった。Tの暴力で傷害を受けたにもかかわらず彼女が被害届を出さなかったことで釈放されているが、そのことへの彼女に対する感謝の気持ち(心的つながり)が芽生え、Tの離脱の決断を後押ししたのではないだろうか。

## VII 結論

Tの逸脱集団への加入は、父親が暴力団組長であったことで、幼少期、友達とも距離を置かれ友達が出来なかったことから、友達欲しさに怠学を繰り返す子たちと遊ぶようになり、徐々に非行、そして犯罪グループに関わっていくことになった。その後、かつての仲間が真面目に働いている姿を目にし、未だにこんなすさんだ生活をしている自分が惨めになり、これがターニングポイントとなり犯罪グループからの離脱につながった、という逸脱集団への加入、そして離脱という一連の流れが明らかになった。

Tの逸脱集団からの離脱後の暴力団への加入は、昔の犯罪グループの仲間との再会にあった。この時、彼らが組員であることを知らず交際を始め、その中で彼らから組員になることを勧誘され、断り切れずに組員となっている。

また、Tの暴力団からの離脱は、彼女への暴力で逮捕されるという予期せぬ出来事が大きく関係している。この逮捕によりT自身が目覚め、冷静さを取り戻し、逮捕後に生じた次の3つの条件が関係していると考えられる(冷静さを取り戻し、この3つの条件を自分のものとして考えることができた結果でもある)。

①仲間から裏切りに遭い、組織への嫌気と仕返しというアグレッションから、実害のない自ら組織を去る「離脱志向」に傾いた。②薬物の影響で彼女に傷害を与え逮捕されたが、被害届を出さずに許してくれたことで、彼女へ

の感謝の気持ちが芽生え、そんな彼女との関係は、Tにとってかけがえのない「居場所」である。③逮捕され、取調官から、離脱した際の就労支援の話が聞かされ、離脱後の生活を支えることになる就労の話に心を動かされた、その「資源」への魅力。これらが合致し、うまく作用したのではないか。

すなわち、Tの離脱に至ったプロセスは、2つの条件、即ち、「離脱志向」（離脱願望）と、「居場所」（彼女との居場所を大切にしたい思い）、そしてこの2つの条件（目的）を達成するには、離脱後の生活を支えるための、もう1つの条件の「資源」（就労）が必要であり、この3条件が互いに、うまく作用したことが、ターニングポイントとなり離脱に繋がったのではないだろうか。

Tのケースから、若者は離脱し堅気になった後も、偶然の出来事など、ある条件がどのように変化し、関係し合うかによって、逸脱や離脱（更生）を繰り返すという事実が明らかになった。

## 注

- 1 公益財団法人暴力団追放兵庫県民センターは、1994年4月に設立され、暴対法の規定により、兵庫県公安委員会から兵庫県の暴力団追放運動推進センターとして指定を受けている法人で、事業の一つに暴力団離脱者支援事業がある。

## 文献

- Becker, Howard (1973) *Outsiders: Studies in the Sociology of Deviance*, Free Press (= 2011, 村上直之訳『完訳 アウトサイダーズ—ラベリング理論再考—』現代人文社)
- 廣末登 (2016) 『ヤクザになる理由』新潮社
- (2018) 『ヤクザの幹部をやめて、うどん店はじめました。』新潮社
- 河野莊子 (2009) 「Resilience Process としての非行からの離脱」『犯罪社会学研究』34号
- 松浦直己 (2015) 『非行・犯罪心理学—学際的視座からの犯罪理解—』明石書店
- 森康博 (2020) 「ある暴力団離脱者の生活史—暴力団への加入と離脱におけるインフォーマルな関係性に着目して—」『Core Ethics』16号
- 岡邊健 (2013) 『現代日本の少年非行—その発生態様と関連要因に関する実証的研究—』現代人文社
- 知念渉 (2018) 『<ヤンチャな子ら>のエスノグラフィー』青弓社
- 打越正行 (2019) 『ヤンキーと地元』筑摩書房
- Willis, Paul (1997) *Learning to Labour: How Working Class Kids Get Working Class Jobs*, Columbia University Press (= 1996, 熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房)
- 山脇望美・河野莊子 (2020) 「非行少年における自閉スペクトラム症傾向と攻撃性と粗暴行為との関連」『犯罪心理学研究』第57巻第2号
- 横地環ほか編 (2018) 「青少年の立ち直り（デシスタンス）に関する研究」『法務総合研究所研究部報告58』

## Process of Joining and Leaving a Deviant Group: An Analysis of Youth's Life Story

MORI Yasuhiro

Abstract:

This paper aims to better understand what triggers youth to repeat join deviant groups, and to ultimately leave these groups. In this study, I focus on an individual T who repeated his membership in and disengagement from such groups, and have been no more involved in any group. The quantitative interview research of his life path demonstrates core factors for pushes and pulls. T's initial reason for joining a deviant group was loneliness due to his father who was a crime group leader. He started to associate with delinquent friends, and eventually membership in a crime group. Although former members who got back to a healthy life course helped him to follow, he was again alluded to join a mafia-like organization by different former members. However, the arrest for violence against his lover gave a significant impact to make a decision to leave the group, to value their partnership, to encourage himself to find employment for the future. As the result, the combination of these three motives functioned mutually as the core factors of disengagement. The findings reveal that the combination of certain reasons triggers youth to join or leave the deviant groups at any occasion.

Keywords: Bōryokudan, Life cycle, Withdrawal, Rehabilitation, Delinquency

### 逸脱集団への加入と離脱のプロセス ——ある若者の生活史から——

森 康 博

要旨:

本論では、若者の逸脱集団への加入やそこからの離脱に成功する原因を明らかにする。本研究では、逸脱集団への加入と離脱を繰り返した後、現在は更生している一名の若者 T に着目する。質的インタビュー調査で彼の生活史を描出することによって、加入と離脱の根本的要因を論じる。彼の逸脱の最初の動機は、父親が暴力団組長であったために、孤独な幼少期を過ごしたことにあった。不良少年と交際し始めた T は、犯罪集団の一員となってしまう。更生した嘗ての仲間らに感化されて自身も離脱に成功するが、異なる嘗ての仲間からの誘いで今度は暴力団に加入する。しかし、恋人への暴力で逮捕されたことが深大な動機となり、離脱の意志を固め、恋人との関係を尊重し、将来の就労へと奮起した。結果として三つの条件が上手く相互作用したことが離脱に繋がった。この事実から、若者はある条件が整えば逸脱や離脱を引き起こすことが明らかになった。